

折々のことば

昨今、朝夕は涼しいが、日中陽の当る戸で、作業していると、汗ばむ位の暑さになる陽気になった。『The Lussola Kitchen (R6 10/12)』にのり付けした、横山 9.8m の左舷側艇体の半膜ならぬ、白色のカッティングシートを少しづつ、はがして、朝の行事にしている。隣の会社の従業員の顔馴染みの人が、立ち寄って話して行った。『暑バイトの被害で、会社が忙しい……』との事で、何で世の中が動いているのか、想像もつかない事が多い。ゴミが漠中から恐竜の化石が見つかる様なものです……。

朝日新聞の一面に、折々のことばがあり、毎朝気になって、ちよっとだけ読ませてもらっている。

『知^ち慧^えの研究は、棺^{ふた}の蓋をするときに終^おわるのだ』勝海舟を読むと、人生の味わいが、『なるほどやっはり……』と思える。『要は棺の蓋をするま

で、頑張りや……』と解釈出来る。失敗して、半膜のカッティングシートがちぢれた黒色のゲルコートの上に張り付けている。ステッカーはがしを持って、ビニールのゴミ袋の中に、白色のカッティングシートのゴミを入れる。時折、『あれ……』と思う位、すでに、はがれており

折々のことば

2024 10/12(月)

鷲田 清一 3240

智慧の研究は、棺の蓋をするときに終るのだ。

勝海舟

「道」について「必ずこれのみと断定する」のを自分は好まぬと、徳川の旧幕臣は言う。どんな道も「大小厚薄濃淡の差」がある。それらをあれこれ吟味し、上には上があると考えるのは愉快なこと。大仕事は、焦っても、その実現を期して地道に努力するだけでも成就しないし、それをなしうる逸材も、誰かが「製造」しようとしてできるものではないと、『氷川清話』から。

羊膜の様に、簡単にはかせる所もあり面白い。
「面白いと思うか、大変だ……」と思うかで、たどり着く場所
が変わってくる。

そもそも、誰もうらやむ様な快足艇を自作しようと、
発想したのだから、苦労は覚悟の上です。

横山 7.6m (#446 MKII)、横山 12m (#492)、横山 9.8
m (#480) と現図から作ると、横山晃設計の三次元

折々のことば

鷲田 清一

3243

今の人は一人になることの難しさに直面
していると思います。

小川 洋子

誰しも外から窺い知れない「秘密」
の領域を抱えているが、その地下に降
りてゆくのは苦しい。だからつい外の
情報で気を紛らわすと、作家は言う。
こうした領域にあえて分け入らせても
らうことで、心が遠ざかるのでなく、む
しろ近しく感じるようになればいい。
そう希って小説を書いていると、東畑
開人との対談「一人になること、寂し
さについて」(「群像」11月号)から。

2024・10・24

折々のことば

鷲田 清一

3244

自分らしさとか個性というのは変なもの
であり、居場所というのは、自分が変な
ままではいられない場所だということです。

東畑 開人

生き延びるためには「誰かとつなが
る」ことが不可欠だが、他人とは違う
自分だけの「秘密の部屋がある」こと
もそれに劣らず大事だと、臨床心理士
は言う。たとえ歪であつても、怯える
ことなく歪なままではいられない場所が人
には要するというのだらう。小川
洋子との対談「一人になること、寂し
さについて」(「群像」11月号)から。

2024・10・25

の曲面が誘惑してくる。誘惑
される方が悪いのかも矢知れな
いが、人によって好みが変わる。
三口のヴィーナスの像を見て、何
処に感動するか、人それぞれ
です。

横山晃設計の三
次元の曲線の何処に魅了され
るか、各人各様と思われる。
ヴィーナスは美術品なので、見
て楽しむものですが、横山晃
設計の三次元の曲線は船
首波、船尾波と波を起し、
特に、高速で帆走すると船
尾波から音が出て、楽しい。
2024年10/21(月)の折々のこと
ばに魅められて、リリっつ、リリ
っつ建造を楽しめれば良い
と、楽天的に考えて日々努力
するのが、奥の手と悟れる……。

新ヨット工作法 横山 晃著(舟艇協会出版部)の7頁に

3. 玄人へのアプローチ

『ヨット乗りが、海上で常に痛感することだが、風や波や潮には、「相手^{しょうと}が素人だから」という手心が全くない。云いかえれば、「ヨット乗りは、たとえ“アマチュア”であろうとも、“素人”であることは許されない」のである。

同様にフネ自身も、この苛酷な海上では、乗り手と同じに、いや、それ以上に、「自作舟艇でも、素人造りだから」という甘ったれば、全く許されない」ことになり、しかも自分の生命を賭けて勝負するという破目に追い込まれる。……かくて、自作の第1艇を完成した頃には半玄人に近くなり、2〜3隻仕上げた頃には半玄人から3/4玄人になり、5〜6隻も自作した人は「玄人ハダシ」ということになる。

近頃、芸術を専攻する学生が、ヨットを自作する傾向が顕著になってきた。彼らにとって、それはレジャーや道楽ではなく、意識的に挑む「玄人へのアプローチ」なのである。彼らの情熱の燃え方は様々で、例えば「油絵や彫刻などが、1000年以上の伝統を持つパターンだからという理由でそれを否定するつもりはないが、自分は既製パターン・オンリーにはなりたくない。私はヨットを1隻自作した経験を通じて、造船という仕事^{わざ}が、芸術の一分野になりうる可能性を発見した……」

別の美術大学のインテリアデザイン科を卒業した人は、「私は、以前からあこがれていた海に近づくために、

造船会社の設計部に就職しました。けれども、タンカーは船である必要はなく、海や空でなくても、石油を運べばそれでよいという、いわば目的のためには手段を選ばない小怪物だったことが、無知と幼い夢のせいで私には見えず、海はいいな、お船はいいな、という童謡のままに、タンカーは船だから……と思い込んだのが間違いでした。この職場で私が知らされたのは、営利用の船舶は、いかに望んでも、陸上の営利目的社会の手足に過ぎないということでした。結局、私が夢見ていたような、海に密着した船は、帆船が終わった時に終わっていたのかも知れません。陸上の乗物では、雨に濡れ、日も照りつける自転車が、一番良い乗物と信じているような私の時代錯誤かも知れません。……けれど、海への接触を切望した私の願いは完全に拒まれて、造船会社と退職しました。……」

中略とあります。そして最後に、『アメリカではすでに、木造船を造ってくれる造船所がなくなったというから、日本も遠からずそうなるだろう。その時には、アマチュア造船家の作品が、多くのユーザーから注目され、期待を集めるようになるだろう。そして、アマからプロへの転向が、スムーズに行なわれ、今後は工芸家と呼ばれるようになるだろう。』とあります。

我々、自作者のバイブルとなった、新ヨット工法が再出版される時代にならないと、アマからプロへ転向する人は出ないかも知れない。

工芸家の作る作品は、美術品と普通に言われている……。

手元の広辞苑には、『しゃくれゐ：中くほみになつて
いる』とあります。又、インターネットの国語辞典には、
『しゃくれゐ：中ほどかくほんで、先かつき出ている。』と
あります。

横山晃氏の設計された船の特長は、楕円形の曲線と
しゃくれ曲線の融合と思えます。 他人がどう感じ

るかは知らないが、魅了されることは間違いない。

文春文庫 '85年版ベスト・エッセイ集 人の白ひ

日本エッセイスト・クラブ編 も面白く、幾度も読み返
している。 218頁から『モナリザの眼』がある。彫刻家

の矢越保武著です。『いっから、そう思うようになった
か。 レオナルドの「モナリザ」を見ていて、あの眼には、

何かがあると気がついてしまった。 レオナルドの描

いた他の絵には、あのような眼はない。あの眼は
一本なんだろうと、ずうと新しい間、気になっていた。

キラッと光る眼、話しかける眼、微笑する眼、愁いに
沈む眼、千差万別の眼がある。だが、モナリザの眼は
その中のどれでもない。あの眼はモナリザにしかない
特別の眼だ。 ここまでは感じていたのだが、

ある時、ふと、あの眼は妊婦の眼だ、と突然気がつい
た。唐突であるが、そう思った。……後略』とある。

さすが彫刻家の眼で、「正論」8月号からの出版の様で
す。 毎日妊婦を見ている産科のドクターは、見慣れ

て、見えなくなってしまうのかもしれない。

その他に、御紹介したい逸品が多い。

「時は巡り 友は去り 森繁久彌」 「畳二枚の座敷

半 阿久悠「鉛色の目 三浦綾子」etc.etc とタイトル
がひのつたりの名文を楽しめます。

折々のことばで書き始めたが、「時は巡り 友は去り
森繁久彌」の名調子に、「花ひらき花香る。花こほれなま
薫る」と認めてお渡した。何かいつまでも心にひかかり
これが何田邦子を偲ぶよすがとはなり得ぬような気もし
て、石の前で「貴女も罪な人」とうらみつらみをくりかえした。
『…後略』とあります。

R
6
毎日、毎日、楕円形の曲線としゃくれ曲線の融合美を
堪能していると、産科の医者のように、モナリカの眼に
気がうすかなくなる恐れがある。

10/27
生き延びるためには、「秘密の部屋がある」こともそれに劣
らず大事なようで、21坪の鉄骨スレートぶきの建屋が、毎日
午前中に出向いて、救いの場になっている。

伊
予
「居場所」というのは、自分が変なままでいられる場所だとい
うことです。』だそうなので、別荘を手に入れるのは
賢い選択なのかも知れない。

藤
1973年に出た新ヨット工法を当時1,600円で買った。
はじめに「船を造ろう」と云う意欲が、失望から人間
を救うに違いない。人間にとって、船は単なる道具では
なく、希望と自由と、勇気と信頼のシンボルだった。……
それは昔の話だけでなく、現代と未来のテーマとしても
重要であるに違いない。波は、風は、神のあはて
は新鮮で素晴らしく、そして恐ろしいと云う現実には、
大昔の人々にとっても現代人にとっても変わることはない。
……だからこそ、船を自分の手で創り出す意義は大きい。後略